

第6回教員推薦図書（2023年12月）

危機管理学部教授 宮川 正 先生

◆『吉田茂の見た夢 独立心なくして国家なし』

北康利著

扶桑社

本書は1951年にサンフランシスコ講和条約が締結され、日本が国際社会に復帰して以降、吉田茂が目指したことに焦点を充てている。本書は日本の戦後政治の混沌とした動きを描写しており、55年体制に至る過程での泥臭い人間模様なども興味深い。そこで登場する有力政治家の「国家」に対する思いや使命感には、現在の政治には感じるできない何かを感じることができる。吉田茂は、間違いなく、日本の戦後を形作った宰相であり、その功績は讃えられて然るべきであるが、その一方で結果として首相の座にしがみついたような評価もあり、人間「吉田茂」をフェアに描写した内容となっていることに好感が持てる。

◆『西郷隆盛 命もいらず名もいらず』

北康利著

ワック



明治維新によって日本がめざしたものは、近代国家に生まれ変わり、欧米列強に伍して国際社会における地位を得ることだった。しかし、西郷にとって近代化とは、先進技術を導入して国力を高めることではあっても、決して欧米化を意味するものではなかった。おのれを捨てて義と至誠の精神に生きた西郷は、日本の伝統的な価値観を貫き、帝国主義的覇道を否定して、「徳」による国家を建設しようとした。当時すでに伝説的な存在であった西郷という偉大な人物の生涯をたどり、現代の日本人が国難にいかに対処すべきかの指針を示す、大型ノンフィクション本である。

◆『歴史に消えた参謀 吉田茂の軍事参謀 辰巳栄一』

湯浅博著
産経新聞出版



本書は、戦前・戦後を通じた昭和日本の「国家戦略と情報」を考える上で、絶好の書となっている。辰巳栄一は、従来、戦前期の陸軍部内で数少ない英米派としての側近として取り上げられているが、実は、今日の自衛隊の前身の警察予備隊を創る黒子役を果たしたのが彼である。マッカーサー占領時の GHQ、および G2 の下で白洲次郎が通商面の参謀なら、辰巳栄一は国家治安、公安調査、情報の参謀であり、現在の組織の基礎を考えたのも彼であった。その意味からも、本書を通じて今こそ見直されるべき人物である。

◆『この命、義に捧ぐ 台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡』

門田隆将著
KADOKAWA

本書は、一般にはほとんど知られていない元陸軍中将、根本博の数奇な人生をたどったものである。根本は戦後、国共内戦で蒋介石が危機に陥ったとき、彼を支援するために台湾へ密航した。その後、金門島の防衛で軍事顧問を務め、共産軍の上陸作戦を壊滅させて、国民党唯一の勝利に貢献する。もっとも、日本人の力を借りたことは民族的、政治的に不都合とみえて、この事実は台湾でも長いあいだ伏せられていた。それが、ようやく解禁になったのは、近年(2009)になってからである。蒋介石に関しては、評価の分かれる部分もあるが、著者は本書を根本博の抱く〈義〉一本に絞って、日本人の持つ特質に迫ろうとしている。名誉や栄光を求めなかった根本も、死後40年以上をへて台湾で復権されたことを知れば、それなりの感慨を覚えるに違いない。